# 復讐者はシャーマン！！

秋月秋代

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
復讐者はシャーマン！！

【Ｎコード】
Ｎ４４６９Ｚ

【作者名】
秋月秋代

【あらすじ】
転生者はシャーマンの続きモノ。

闇ルートです。

更新は不定期です。
かなり遅くなる予定。

## ～第零廻～　プロローグ

▼三人称▼

崩れた家の前、そこに一人の男が居た。
男は目の前の光景が信じられず、崩れた門に目を向ける。
目を向けた先には『麻倉』と書かれた表札がある。

「親父、お袋、婆さん、爺さん、兄さん……」

男は崩れた家に入り、家族を探す。
しかし家には誰もおらず、夥(おびただ)しい血の跡しか残っていなかった。

彼が家に戻って来たのは、それなりの訳があった。
修行の旅に出て世界を知り、一人前のシャーマンになる事。
その修行が一段落着いて、久々に許婚達と連絡を取ろうとした所、誰にも連絡が着かなかった。
不審に思いながらも、とりあえず実家に帰ろうとして、帰ってきたらこの光景があったのだ。

「いったい何が……」

『旦那、様……』

「！！　孫明！！」

一人呆然としていた葉生の前に、かつて共に暮らしていた道潤のキョンシーだった孫明が現れた。

そして、孫明の口から衝撃的な事が語られた。

『管理局がお嬢様方を！！』

「なん、だと……」

孫明の説明を受けて、葉生の中にある小さな芽は一気に成長して咲き誇った。

黒く、どす黒く、闇のような黒い花を……。

廻っていた歯車は動きを停めて、誰にも気付かれずに廻っていた歯車は、表へと踊り出た。

廻る、廻る。

憎悪と絶望の歯車が廻る。

男は愛と希望を失い、憎悪と絶望が与えられた。

▲三人称▲

男の名前は、麻倉葉生。

管理局に仇成(あだな)す存在。

## ～第一廻～　永遠の別れ（前書き）

特務部隊と違って短い……ｏｒｚ

## ～第一廻～　永遠の別れ

▼葉生視点▼

孫明から真相を聞き出してから、生前に大魔導師と言われてた霊を使って、オレは次元世界へと飛んだ。
そして目に着いた管理局の奴らを焼き殺したりして、着々と管理局が取り締まってる違法研究所へ近付いて行った。

『葉生……もう止めましょう。　こんな事をして……なんになるんです！！』

「黙れ、アルトリア……邪魔をするなら、貴様も焼滅させるぞ」

『ッ！！　本、気で言って、るのですか？』

「貴様こそ、本気で言ってるのか……」

――ボォシュゥウウウッ！！

『……』

オレの怒りに触れてか、スピリット・オブ・ファイアがオーバーソウルの状態で現れる。

『ッ……』

己の不利を悟ったのか、アルトリアは顔を俯かせ何も言わなくな

った。
　そんなアルトリアに、孫明が言った事を思い出させながら、スピリット・オブ・ファイアのオーバーソウルを解く。
「ジャンヌ達は朝昼晩問わず、男の慰みものに使われ……何処の誰とも知らぬ男の子を宿し産んでいる。　そして、生まれた子を抱く事すら出来ずに離れ離れだ。　何故なら、生まれてきた子はシャーマンとしても、魔導師としても優秀なのを管理局の洗脳紛いな教育を受け、親父と爺さんの脳から、麻倉の秘術を取り出してシャーマンを育成！！　シャーマンとしても魔導師としても不出来な子は、己の母と知らずにジャンヌ達を……そんな奴らを許せるか！！？」
『そ、それは……』
「……なんになるかって言ったな？」
『はい……』
「救いだよ。　少なくともジャンヌ達は地獄から解放される。　行くぞ」
『……はい』
　止めていた足を動かして、オレ達は最初の研究所に到着した。
　中に入ると、そこは異界のような感覚を受けた。
「これは……」
『！？！？』

『ぐ……力が……』

「スピリット・オブ・ファイア、アルトリア……もしかして霊の力を封じる結界か！？」

「その通りさ…」

オレの言葉に応えたのは、入口を塞ぐように立っている管理局の局員だった。

「時空、管理局……」

目の前が赤く染まる。

頭が、局員を殺す事を考えるのが止まらない。

「この結界はな霊が強ければ強い程、霊の拘束力が強くなる代物でよ。　お陰で良い思いをさせてもらってるよ」

――ブチッ！

アレの言葉を聞いた瞬間、オレの中の何かが切れて、気付いたらアレはモノ言わぬ屍となっていた。

「つまりは此処に居るのか、ゴミが良い思いをさせてる……オレの大切な人が……」

おそらく麻倉家を襲ったのも、この結界のお陰なのだろうな。と当たりを付けて、オレはさらに奥へと目指した。

研究所の奥は、想像を絶する程のモノだった。
まずは防衛機能。
これは霊の力を制限する結界しかなく、にわか圏境（李書文が使う気配遮断のかなり劣化ｖａｎ）で、監視カメラに映る事なく進めた。
まぁその程度の事は、どうでも良かった。
だが見てしまった。
そして自分の愚かさに絶句した。
オレはどこか勘違いをしていたらしい。
ジャンヌ達も人間、相手も人間だからと……だが、現実はどうだ？　マリオンを母体Ｎｏ．５と呼び、むさ苦しい男共に犯されてる。
目は虚ろで何も映さず、ただ人形のように扱われていたのだ。

「……」

「気持ち良い事には気持ち良いが、無反応ってのは楽しくねぇなぁ」

おいおい、無理矢理しといて楽しくないだと？

「だったら電流を流すか？　良い声で鳴くぜ」

もう良いだろう？　これ以上苦痛を与えさせるなよ。

「頼む」

「了解」

――バチッ…バチチチチチチチ！

「あああぁぁあああああぎゃぁぁあああああがぁぁあああああッッ！！！！！」

――ブツンッ！！

マリオンの悲鳴を聞いて、オレの意識は闇の中へ堕ちた。

▲葉生視点▲

▼報告書▼

第三十二管理外世界で、シャーマン生産プロジェクトの第五研究所が崩壊。

母体Ｎｏ．５、一名……死亡。

研究員、三十名……死亡。

出来損ない、三百名……死亡。

護衛の管理局員、十五名……死亡。

計、三百四十六名……死亡。

崩壊した原因は不明。

しかし崩壊する前後、一人の人間を目撃したとの情報あり。

現在、その人物の特徴を重要参考人として捜査中。

以上。

▲報告書▲

▼葉生視点▼

目を覚ますと、なんの変哲もない洞窟に居た。
腕の中には、冷たくなったマリオン。
呼吸も鼓動も感じられない、誰が見てもわかる死。
シャーマンのオレなら、蘇生は簡単だ。
これが普通の死だったら…。

「……遅くなった」

だけど……

「ごめんな……」

だけど、マリオンの死は……

「遅くなってごめん……」

魂が完全に消失して、蘇生出来ない死だった。

『『……』』

マリオンを囲うように、スピリット・オブ・ファイアと黒く染まったアルトリアが霊体のまま現れる。
二人はマリオンの死を悲しむように、スピリット・オブ・ファイアは天を見上げ、黒いアルトリアは紅い涙を流した。

そして、研究所を破壊してから次の日。
オレはマリオンの遺体を、スピリット・オブ・ファイアの炎で骨まで焼き尽くして、次の研究所へと探した。

▲葉生視点▲

## ～第一廻～　永遠の別れ（後書き）

次回から時間が飛んだりします。
もしかしたら飛ばないかも？

## ★～プロフィール～★（前書き）

※復讐者の方では、葉生をハオ
シャーマンキングのハオをシャーマンキングと表記します。

★～プロフィール～★

▼葉生と葉生の持霊▼

名前：ハオ・アサクラ

性別／年齢：男／１７歳

出身地：日本・海鳴市

巫力数（前回値）：ソクテイフノウ（１２５億）

備考：管理局に家族を殺され、大切な人達を生産道具にしてる所を見て、人間に希望を持てなくなった葉生。

持霊１

名前：スピリット・オブ・ファイア【超究極形態】

性別／ランク：女／神

霊力数：ソクテイフノウ

媒介：酸素・憎悪・殺意

戦闘スタイル：完全焼滅

備考：ハオの憎悪に触れて、シャーマンキングから預かっていた五大神ニ体を瞬殺して喰らい成長した。
さらに酸素が無くとも、ハオの憎悪か殺意によってオーバーソウルになる事が出来る。

持霊2

名前：アルトリア・ペンドラゴン

性別／ランク：女／神

霊力数：ソクテイフノウ

媒介：憎悪・殺意・酸素・エクスカリバー

戦闘スタイル：完全滅斬・完全焼滅

備考：ハオのストッパー的存在だったが、ハオの強大な憎悪によって魂レベルまで侵食され、闇へと堕ちた。
スピリット・オブ・ファイアと同様、ハオの負の感情でオーバーソウルが可能となった。
姿はセイバーオルタをさらに禍々しくした感じ……。

▲葉生と葉生の持霊▲

## ～第二廻～　無限の欲望（前書き）

※復讐者の方では、葉生をハオ
シャーマンキングのハオをシャーマンキングと表記します。

## ～第二廻～　無限の欲望

▼三人称▼

ハオが第五研究所を襲撃して一年が経った。
この一年の間、サチ、ミイネ、潤、他のシャーマン達が捕われてる研究所も襲撃して、数々の別れを経験した。
そして、管理局から広域次元犯罪者として指名手配が掛かった。

――ドォオンッ！

「「「ぎゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」」」

――ボォシュゥウウウッ！！

「あぁぁぁぁぁぁぁぁがぁぁぁぁぁぁあついぃぃぃぃぃぃ！！」

「がぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

――ズガァァァァァァンンッ！！

「「…「うぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」…」」

今、第二十七管理世界では、そのハオと管理局が戦って――――

いや、ハオが管理局相手に圧倒していた。

「なんで、結界が効かないんだ！！」

「腕がァア！！　俺の腕がねぇえよぉおお！！」

「た、助けて……い、いやぁぁあああ！！」

ーーズドォォオオオオオオオンンッッ！！

「「「うがぁぁあああああああああっ！！！！」」」

一際（ひときわ）大きな炎と黒い光が上がり、ハオを逮捕しに来た連中とハオを消しに来た連中は、完全に壊滅した。

しかし、ただ壊滅しただけでは、ハオ気は晴れず……

『まだだ。　下郎共』

『……！！』

『『…『『ヒッ！！』』…』』

魂となった連中は、黒き暴龍となったアルトリアとスピリット・オブ・ファイアによって、囚われる。

「……チッ目障りだ。　消せ」

『ハッ！』

ーーズガァァアアアアアアアアアーーーンンッッ！！！

ハオの命令で、一瞬にして魂を焼き尽くすアルトリアとスピリット・オブ・ファイア。
それを確認したハオは、スッと右腕を垂直に上げて人差し指を伸ばす。
アルトリアもスピリット・オブ・ファイアも、ハオが指差した場所を見るがそこには誰も居ない。

「消せ…」

しかしハオは、指の先に居る何かを消せと言ってきた。
ならばそれに従うのが、ハオを主として付き従うアルトリアとスピリット・オブ・ファイアが行動するのは必然。

スピリット・オブ・ファイアの手に炎が上がり、黒き暴龍の口内に黒い光が漏れる。
そして、今まさに解き放とうとした時、ソレは現れた。

「ちょ、ちょっと待って欲しいですわ！」

何もない空間から現れたのは、栗色の髪に丸眼鏡を掛けた女性と青髪の女性、極めつけは変態丸出しの服装。

「構わん消せ、目の毒だ。　特に眼鏡は念入りにだ」

「な、何故！？」

「ライドインパルス……ッ！！」

『……』

ジッとしてても攻撃されると感じたのか、青髪の女性は自身の能力を発動しようとした時、目の前に突然現れたスピリット・オブ・ファイアに思考が停止する。

――バキィイインッ！！

「ガッ！？」

「トーレお姉様！！」

『約束された（エクス）…』

「ヒィイッ」

そして黒き暴龍が、黒い波動砲を放とうとした時……

『アイアンメイデン・ジャンヌの居場所を知りたくないか？』

「！！　待て…」

ハオの前に一つのモニターが現れ、今まで探してきた人物の名前を出された事により、ハオはアルトリアとスピリット・オブ・ファイアに待ったを掛けた。

『攻撃を止めてくれてありがとう』

「ジャンヌが居る場所を知ってるのか？」

『勿論……』

「言え」

『その前にこっちへ』

「言わないなら、あいつらを消す」

『やったら教えないよ』

「地道に探す」

『最後の一人を失いたいならするが良い』

睨み合う二人。

しかし、互いの思考は違った。

ハオは怒りに顔を歪め、モニター越しの男はニヤニヤと厭らしい笑みを浮かべる。

そして男の言葉に、ジャンヌがそこに居る事も理解した。

「無事、なんだろうな？」

『記憶と精神と子宮以外は……。　先に言っておくが、私の所に来た時の状態だ』

「……わかった」

そう呟いて、ハオはオーバーソウルを解いた。

『ありがとう。　クアットロ、トーレ…彼を丁重に連れてきてくれ』

「はいは～い♪（ボコッて気絶させても……）」

「オレに危害を加えない方がいい。　スピリット・オブ・ファイアは、霊体のままでも炎を扱える。　それに、こっちはジャンヌ達が死んでると割り切ってるんだ。　お前らを殺してしまっても、あとはこいつを殺しに行くだけだ」

『クアットロ……彼に危害を与えずに連れてきてくれ』

「り、了解ですわぁ……」

クアットロの返事を聞いて、男は『頼んだよ』と言ってモニターを閉じた。

そしてトーレとクアットロに挟まれるように、ハオは第二十七管理世界から消えた。

▲三人称▲

▼ハオ視点▼

トーレとクアットロに連れられて、オレはあの男のアジトに来た。

アジトの中には、丸いロボットがあったり、中に人が入ったカプセルがあったりと胸クソが悪くなるようなアジトだった。

「此処だ」

「ドクター？　連れてきましたわ」

――シュンッ！

「ッ！！」

扉が開いて、出迎えて来た人物に驚く。

銀の髪、赤紫色の瞳、そして隣に居る霊体のシャマシュ。

間違いなく、アイアンメイデン・ジャンヌ……その人だった。

「ようこそ、お越し下さいました。　どうぞ中へ」

「あ、ああ……」

しかしジャンヌは、オレに反応する様子もなく、淡々（たんたん）と対応するだけだった。

そして中に入ると、入れ替わるようにジャンヌが部屋から出て扉が閉まった。

「……」

「気になるかい？」

「……あいつは……」

「察しの通り、キミの許婚だった子だよ。　今ではX（エックス）だ」

X……シャーマンキングが居た頃の影響が出ているのか？

「そうか……それで、オレに何の用だ？」

「共に時空管理局を見返そうと思ってね」

「……」

「キミが協力してくれるなら、彼女の傍につけるが……どうする？」

……悪くない申し出だな。

だが、オレは……

「わかった……協力はしてやる。　だが、あいつをオレに近付けるな」

もし、あいつの記憶が蘇りでもしたら、オレは復讐を忘れてしまう。

いや……記憶が無くとも、一緒に居るだけでオレが満足してしまう。

それだけは、何としても阻止しないといけない。

でないと、マリオン達に申し訳が立たん。

「私はそれで良いが……良いのかい？」

「ああ……」

「わかった……」

こうしてオレの復讐に、協力者が出来た。

▲ハオ視点▲

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4469z/

復讐者はシャーマン！！

2011年12月18日10時51分発行